

第十三回講義へのコメント

今回の授業では主に前回の宿題小テストの解説が中心であった。それらを用いてさらに応用するような話もあった。そこで私は、問題として解いていただけた学生のコメントを引用し、考えたことを書き記す。

使うのはこちらのコメントである。「経済学や法学といった学問と違い、哲学は発展させても私たちの生活に直接的な利益はもたらさないように思えてしまうのです」というものだ。

それに対する回答が、「人は利益のためだけに行動するものではありません。」である。

私もこの意見に賛成である。しかし、この~~質疑応答には矛盾点がある質問に答えていない~~。確かに、人は何もかもを利益のために行動するわけではない。自分に直結する見返りがなくても、人間は思考することで弱い立場の人やものを守る。代表するのがボランティアなどだ。これらの見返りを求めず動ける行動というのは、人間が相手の状況考えることのできる生き物だからである。

しかしながら、それ故に哲学が~~直結する直接的な~~利益をもたらさないという答えにはならない。今日、主に文系の学問は理系に比べて~~価値がないとされる~~。哲学を始め、国文学や日本語学など大学における文学部にまとめられる学問はすぐに利益にならないとされ、文部科学省も大学の文系学部の削減を要求してくるのが現実だ。それほどこれらの学問に利益、つまりはお金となったりや人の日常生活に還元されるものがないということなのである。

したがって、人が全ての物事に対し利益のために行動するのではなかったとしても、その事が哲学が直結した利益をもたらさないことに繋がることはない。哲学は学問的価値は非常に高いが、~~近い将来に確実に私たちに与える利益はない~~。

今回の授業では、小テストの学生の授業コメントへのコメントの解説やデカルトの考え、またデカルトのあとの世代の哲学について学んだ。アリストテレスは神は世界の第一原因でまた不動の動者、永遠にして善なる生者と考え、またこの考えは「創造神」というキリストの~~教義教義~~とは矛盾している。またこのアリスとテレス研究への不満を持ったデカルトは「絶対に疑えない真理」をもとに学問体系を作り直そうとした。また、自身や世界が本当に実在するのかなどといった方法的懐疑、実在するのは私の心だけという独我論、心と身体はどうして相互作用できるのかといった心身問題などを説いた。またその後心問題は

コメント [y1]: 「される」という受け身表現は避けて、だれが価値がないと言っているのかを明記するように。

コメント [y2]: 哲学を学ぶことで身につく「正しく考える力」は、日常的に役に立つ（いらん物を買わないとか、常識にとらわれないビジネスを思いつくなど）だけでなく、民主主義を機能させるという大きな利益があります、とも言いました。コメント y14 が付いている学生コメントを参照。

マルブランシュやライプニッツによって展開された。マルブランシュは物理現象や意思はきっかけで感覚や身体運動は神がおこし、普遍的な知識は神のうちにあるとする機会原因説をとき、ライプニッツは予定調和説をといた。

アリストテレスは全ての物事には potential があって、~~potential があるからこそそれが actual になると述べた~~ (それが、世界が生成変化することの原因だと考えた)。アリストテレスは世界の第一原因は神であると述べ、物事を論理的に説明した。それに対抗したデカルトが、物事全てを疑って、哲学を改め直した。人間の存在までも疑い始め、世界の実在性、心と身体の関係が問題となった。しかし、神は実在するため、自分も実在し、世界も実在するという結論に至った。

デカルトの次世代の哲学者であるマルブランシュとライプニッツが身体問題を展開させた。マルブランシュは、機会原因説をとえ、物理現象はきっかけであり、神が感覚を起こすと述べた。意志はきっかけであり、身体運動は神が起こすとしたのだ。

今回の授業では、前回の小テストの答え合わせをもとにこれまでの内容を復習した。また、これまでも何度が出ていた「神」の理論についての話もあった。人間が「思う」ということから行動に移すことは、マルブランシュによると人間が「思う」と、それを神が感知して神が人間たちを動かし、それによって人間の身体が動くというプロセスをふんでいくという。神についてはアリストテレスなども理論を展開しており、哲学者によってさまざまな捉え方がある。しかし、それらの考えはキリスト教の考え方に反することもあり、矛盾点を残していた。

公理系とは公理と推論規則から導き出される定理の体系である。つまり、定理とは公理を出発点とし、推論規則で到達できる命題である。

また、存在論では、**be 動詞は「存在」と「~である」の二つの意味を持ち、一つ。**プラトンは個物の本質が**存在するのではなく、個物のイデアを見て個物だと認識してイデアとして存在している**と主張した。**つまり逆に、**私たちが感覚する個物は**実は存在せず、**見せかけのものである。一方、アリストテレスは存在するのは個物であり、その個物を**言葉で示すものの本質は個物とは別のものとしては存在しない**とした。**物の区別は言語に左右されないと主張した。**アリストテレスは神についても論じている。神とは世界の第一原因であり、

コメント [y3]: どんな話だったのか、具体的な内容を書いてください。

コメント [y4]: アリストテレスは、当然そうだと考えていたから、あえてそのような「主張」はしていない。

不動の動者、永遠にして善なる生者であると理論づけた。しかし、「創造神」というキリスト教の教義との間に矛盾が生じた。デカルトは世界の存在性を論じる学問的知識の真理性を確保するため、「私はある」という絶対に疑えない真理を前提に置いた。しかしその過程で、神が偽った場合、この世界は想像なのではないかという疑問を提起したもぬぐえない。そこでデカルトは世界の実在を示すために、神が「善」であるという証明をした。この証明により、神が「偽」であることはないと示された。よって、世界の実在性や数学が確実なものになった。しかしこの理論にマルブランシュが異論を唱えた。

コメント [y5]: それでどうなった？

コメント [y6]: どのような異論を唱えてどう解決したのか説明してください。

デカルトは「絶対に疑えない真理」=「私はある」といっていたが、全てを疑ってしまったらそれすらも危うくなってしまいます。例えばこの世界自体が幻想かもしれないし、自分も人間だと、思いこむようにプログラムされたロボットかもしれない(もともとこの時代にプログラミングがあったかはわからないが…)。

コメント [y7]: もしそうであったとしても、「私が考えている」のであれば、「私はある」でしょう。

そして人間とロボットの違いが会話できるか出来ないかという風に定義したが、その当時はそれで区別できたかもしれないが今となってはロボットは会話も出来るし人型ロボットなども出てきた。その点においてだんだん人に近づいていっているようにも思える。

これから先、今人間がしている仕事がどんどん AI に取られていくという予想を立てている学者もいる。-どうして人ができない分野のロボットを作らないで人の行動とかぶるものを造ろうとするのだろうかという疑問を持った。

コメント [y8]: ロボットは(あるいはすべての道具や機械は)、人ができないことをするために作られています。

コメント [y9]: 疑問を持った理由、自分なりの答えとそう答える理由を書くように。

今回の講義は前回来た学生コメントに対する応答を行う回だった。

扱われた主要な内容の一つは、「正解はわからない」という学生コメントに関連する言及だった。まず、その問いそのものに対しては、「歴史的事実に基づけば、『正解』といえるものを見出せる」と回答した。例えば北朝鮮が「拉致問題は事実無根」などのように、過去に起こったことを隠そうとするようなことをしても、そういった資料はちゃんと残っていることが多いのでそれは間違いであると判断できるということだ。他にも、「正解がない=何を書いてもいい」という等式を批判したりもした。「正解」はなくとも「確実に間違いだとわかるもの」というのは存在していることが殆どだからだ。物事を一元的に考えてしまいがちな知恵のない者は、わかりやすい等式に当てはめてしまうことが多いが、一つの命題が真であってもその逆も真であるとは限らないということの典型例の一つであるといえる。

講義内で扱われたもう一つの内容は、神に関するものであった。

デカルトは「物体はひろがりを持つ」とし、その認識に対しては「経験ではない」とい

うことに注目した。たしかに「経験によって”知る”」わけではあるが、その知識は「自分が知ったから正しくなった」わけではない。 $1+1=2$ という事実は自身がそれを導き出す経験により正しいとわかるが、その「経験によって正しくなる」というわけではないということだ。 $1+1$ は元から 2 なのであり、誰がどう経験したからといって変わるわけではない。ではその認識が正しいといかにして証明することが出来るのか。自然法則を作り出した神というのは実は悪神なのであり、我々に $1+1=2$ であるという虚妄を見せているのではないか。そうデカルトは考えたのである。そこから数学をはじめとした様々な要素に疑いが出てきたデカルトであるが、最終的に「神が存在すること」「神は善なるものであること」を証明することに成功し、今まで抱いていた懷疑の全てに答えを見出すことに成功したということだ。

今回の講義は主に小テストの回答の解説と、前回の講義のまとめ、マルブランシェの機会原因説についてのものだった。小テストの回答解説には、まずカントの分析的命題への疑問に対して、あくまで人が物体の大きさを知ることが経験的なものであって、物体が広がりを持つということ自体は、デカルトが定義しており、物体自体が備えている性質である。経験的という言葉は個人の経験と受け取られることがあるが、実際は実験により得られた帰納法的な真理という意味合いである。また、他には仲間意識と日本の現状、事実に関する問題と価値判断の正解と間違い、利益になるか否かに関わらない哲学の良い所や面白さ、帰納法の弱点、主観的現実を重視する風潮、アメリカの憲法などの話¹⁰がコメントを通じて行われた。

前回の講義のまとめとしては、公理系とは公理を出発点として、推論規則を用いて、定理に到達する体系である。また、アリストテレスが想定した神とは、運動の第一原因となる「不動の動者」であり、善にして美であるものであり、その思想がキリスト教に取り入れられた。しかし、アリストテレスの神はキリスト教の「創造神」と矛盾する点があり、これを発端としてスコラ学が興った。他に、アリストテレスによると、世界のものは目的、つまりものの可能性が時を経て実体化するとした。

上述のスコラ学に不満を抱いたデカルトは方法的懷疑を行ったが、一度疑いぬいた筈の神の存在を理論に呼び戻してしまうような矛盾がある。また、心身二元論を唱えたが心と体の連動の究明を行わなかった。マルブランシェはこの心と体の連動を、外的な物理現象をきっかけ(occasion)として、そこから生ずる感覚は神が起こすとした。何らかの行動を起こす際にも、意志をきっかけとして、身体運動は神が起こすとした。このような心身の連動を神で説明したマルブランシェの説を機会原因説(occasionalism)という。

講義の中でフランス革命などの戦争の要因に国民間の仲間意識があるという話があった。あくまで自分の経験だが、自分の高校で開催されたレスリング部の日米交流試合のような

コメント [y10]: 話のテーマだけでなく、中身についても一言二言書いてください。

催しがあった。我が校の部が勝つと歓声が上がり、アメリカの部が勝つとブーイングじみたものが上がった。私と一部の友人達はこれに違和感を覚えて両国選手に拍手を送るようにしていたが、今回の講義ではそのことが思い起こされた。スポーツ、あるいはその歴史とナショナリズムの関係は政治利用されることもある。「ホロコースト百科事典」によると、1936年のベルリンオリンピックはナチ政権下で開催され、ナチの言う「アーリア人」文化の正当性、優秀さを訴えるプロパガンダの側面を持っていた。また、後にナチス支持者の監督の作った『オリンピア』という映画にもそのニュアンスが見られる。この時、ナチスは観光客に対する自国の同性愛法を適用外にしたり、反ユダヤのプロパガンダの看板を撤去したりするなどして各国に良い印象を与えるように努めた。結果として、各国報道がナチスドイツに対して肯定的な見解を出したことが国際的なナチスへの批判を緩め、後のナチス増長の一端にもなった 1) 「ホロコースト百科事典」。スポーツだけに限らないが、ナショナリズムと結び付きやすいものは他にもあるだろう。その結果にホロコーストなどの悲惨な出来事の発生を促すことになり得る。勿論、仲間意識は協働など役立つ場面もある。しかし、何のための仲間意識であるか、それが何に結び付くか、「仲間」と切り離して考え続けなければならない。

参考文献・ウェブページ一覧

1) ホロコースト百科事典 「1936年ナチス政権下のオリンピック」, <https://www.ushmm.org/wlc/ja/article.php?ModuleId=10005680>, 2018/7/7 アクセス。

アリストテレスは、モノにはそれぞれポテンシャルがあって、それが現実化していく、と考えた。例えば、ニワトリのたまごは、ニワトリ(ひよこ)にはなるが、トカゲになることはない、ということである。ポテンシャルがアクチュアルになり、そのポテンシャルがアクチュアルになっていくプロセスがこの世界の変化であると考えた。また、アリストテレスは世界には始まりも終わりもないと考え、それを議論の前提にして「神の存在」や「神の諸属性」を証明した。しかし、この考え方だと、キリスト教の創造神を否定していることになる。この二つはアリストテレスの理論とキリスト教を両立させることができないのだ。しかし、この二つを両立させることはできないが、そこで、「何とかして両立させられないか」、「何とかして両立させよう」、と人々が考えたことで、この時代の哲学はものすごく盛り上がった。

また、マルゴブランシュは、機会原因説(occasionalism)を唱えた。物理現象はきっかけoccasionで、感覚は神が起こす。そして意思はきっかけで、身体運動は神が起こす。そして、普遍的な知識は、神のうちにある。というものである。

心と身体は別であると考えられているが、現実問題としては同じで、思ったら身体は動くし、たたいたら痛みを感じる。しかし、物理学的に「心」というものは質量0であるか

コメント [y11]: 参照の始まりの部分が明示されていない。

加筆したような形式にするとよい。(「ホロコースト百科事典」によると〜で始まりを明示し、注を示す記号(1)で終わりを明示する。

コメント [y12]: 制作者は誰ですか?

ら、身体を動かすということは不可能なはずである。しかし、心、すなわち気持ちは、きっかけ **occasion** になる。その、きっかけとなる心(気持ち)**occasion** をまず神が察知し、その察知した神が身体を動かしてくれていると考えたのだ。

アリストテレスは、全ての物はポテンシャルを持っていて、時間を経てそれが現実化すると考えた。例を挙げると、私はおばあさんになるということだ。おばあさんになるのは、今ではなく、長い時間を経てからだ。また、私はおじいさんにはなれない。つまり、おばあさんになるポテンシャルを持っているのである。その後、デカルトは**このアリストテレスの考えに不満を持ち、「自分の目の前の人たちは人間ではなく、ロボットなのではないか。」**、「自分はずっと夢を見ているだけではないか。」と考えた。そして、「絶対に疑えない真理」は「わたしはある。」という結論に至った。次に、心と身体はどうして相互作用できるのかという心身の問題に直面した。しかし、デカルトはこれを証明できず、「現実的にそうであるから。」、「神は善なのだから私たちに騙すことはない。」と考えた。その後の展開として、マルブランシュとライプニッツがこの問題を考えた。マルブランシュは、**機械機会**原因説を説き、物理現象はきっかけであり、感覚は神によって起こされるものであると考えた。

コメント [y13]: 以下で書いてあることは、「ポテンシャル」についての理論への批判ではない。

今回の授業は、前回の復習小テストの解説と、アリストテレスの「神」やデカルトについての前回の授業の復習と、デカルトから展開した心身問題についてだった。

前回の復習小テストの中で、第8問目と第12問目についてまとめる。第8問は、『「経済学や法学といった学問と違い、哲学は発展させても私たちの生活に直接的な利益はもたらさないように思ってしまうのです』というコメントになんと応答したか』という問いであり、**解答回答**は「人は利益のためだけに行動するものではありません」であった。

アリストテレスは「自然学」で「人は生まれつき知ることを求める」と言った。学問は、「知ること」「自分が楽しい・面白いと思えること」が最大の利益である。よって哲学も、日常生活に直接的な利益をもたらさなくても、学ぶことで自分が「楽しい・面白い」と思える知識が増えることそのものが利益になる。

また、哲学を学ぶことで、周りの人が「当たり前だ」と考えることを自分一人が「おかしい」と気づける力を養えれば、その力をビジネスで応用できるかもしれない。世の中の人々が「洗濯物は手で行うもの」と当たり前のように思っているも、「洗濯物を機械にやらせれば、時間短縮になるし、人々の手荒れも軽減できる」と気づけた人もいる。それによってお金儲けができれば経済的利益につながるといえる。

第 12 問は、『アメリカ大統領就任の際に大統領は聖書に手を差し伸べて神に 誓う場面がある。これは宗教分離に値するのではないだろうか』というコメントに対して、新田浩司『政教分離と市民宗教についての法学的考察』ではどのように説明しているか』という問いであり、解答は「アメリカ合衆国憲法が規定する政教分離とは、教会と国家の分離であり、宗教と国家の分離ではない」であった。教会は宗教団体であるので国家権力を握れば、特定の宗教迫害をし、信仰の自由を奪いかねないと考えられるが、大統領が一個人として神に誓っても政教分離に反することはないと解釈されている。

アリストテレスは、神を「世界の運動の第一原因」と考えた。第一原因とは、我々を動かす力を持つ「美しいもの・善なるもの目的」である。すべてのものにはポテンシャルがあり、そのポテンシャルを実現させる過程があるということからこの世界の変化観を説明しようとした。また、アリストテレスは世界には始まりも終わりもないと考え、それを議論の前提にして「神の存在」や「神の諸属性」を証明した。しかし、アリストテレスの考え方は「創造神」というキリスト教の審議教義と矛盾する。

デカルトは、「絶対疑えない真理」は「わたしはある」ことであると考えた。しかし、その考え方も世界の実在性や心と体の関係が問題となった。マルブランシュはデカルトから展開して機械機会原因説を唱えた。「物理現象はきっかけ occasion で、感覚は神が起こす」「医師意志はきっかけで、身体運動は神が起こす」「普遍的な知識は神のうちにある」とかんがえた。心と体は別々の物体であり、神によって我々は体を動かすことができるという考えである。それに異を唱えたのがライブニッツであり、彼は予定調和説を唱えた。「物理現象は因果関係で展開する」「心の現象も因果関係で展開する」「両社はそれぞれ独立に展開するが時間的に一致するように調整されている」と考えた。

今回の授業では主に小テストについての解説を学んだ。デカルトはもの(考えるもの)は広がり=空間があるものと定義した。ものの定義、つまり物体がどういうものかというのを知るのを経験によるものではない。例えば、 $1+1=2$ というのは、覚えること(経験すること)で正しくなるのではなく、正しいことを覚えているにすぎない。真理は論理によって決まる。この考え方を rationalize という。しかし、実験によって明らかになる真理もある。例えば、万有引力の法則がこれにあたる。万有引力の法則とは、互いに質量のある物質 A、B 同士が引き合うというもので、この引き合う力は $A \times B$ に比例し、距離 R^2 に反比例する。この法則は質量がある→引き合うが関連しているがこれは論理的には証明できない。しかし、実験したらこの結果が出てしまう。つまり、実験的には証明できるが、論理的には証明できないものであっても、それが真理となることがあるのだ。だから、真理の種類は 2 つある。ちなみに、この実験的とは人それぞれ異なる、というわけではなく、常に同じ結果が出るはずという前提に基づいて行われる。

コメント [y14]: 新田さんの論文、読みましたか？

コメント [y15]: 「r の 2 乗」ですが、わかっていますよね。

確かに英語と日本語のニュアンスは違うことはある。しかし、我々はそれが「違う」ということを認識しているので、英語と日本語のニュアンスを理解していることとなる。例えば、日本語の「頑張れ」と英語の「Do your best」というのは同じ意味の語として扱われるが、頑張れはできる以上のことを求めるのに対し、Do your best は最善のことをするという事なので、ニュアンスが異なっている。しかし、我々はその違いが分かっているため、翻訳できたりするのだ。

また、今の日本含め世界は、国という共同体の幻想の下で自分とは縁もゆかりもない人を仲間だと思っている。この、自分の国の人々を仲間だという意識というのは確かに良い面もある。生活保障のお金を見ず知らずの人にあげることや、ワールドカップなどで自分とは全く関係のない人を、赤の他人と一緒に応援したりすることなどがその例である。しかし、この仲間意識の考え方にはデメリットもある。もともとこれは戦争するために作られた意識であって、もし自分とは関係のない味方が殺されても殺した方を敵とみなして戦争の意識を高めることができる。このナショナリズムはよい面と悪い面があることをしっかり意識しておかなければならない。

感覚器官が誤ることはある。しかし、見間違えただからといって犬が猫になるようなことは起こらない。しかし、今自分の見たものが真理であると思う人、即真理的な人が増えている。また、正解のない問いが存在するという人がいるが、事実に関する問題であれば正解は必ずある。価値判断による問題であったとしても、正解が複数あるだけで、間違いの答えというものは存在する。何でもかんでも正しいというわけではない。そして、哲学用語を日常生活に浸透させるべきだという意見があったが、その必要はない。なぜなら、「理解」や「経済」などの言葉が普及しているように、その言葉が必要とされれば、哲学用語は勝手に浸透するからだ。

人は利益のためだけに行動するのではない。経済学や法学というのは利益のためというよりもむしろ、不利益を被らないために学ばれる。哲学も利益のためにするのではなく、楽しみのためにやられる。知ってどうなると思うことでも、知ると楽しくなる。人は生まれつき知ることを求めるのだ。また、Reality とは本物っぽいという意味があるので主と客に分かれていても問題はないが、truth は真理なのでこれが主と客で違っては困る。そのため、truth には主格客の区別はつかない。

アリストテレスはこの世界を動かしているものは目的であるとい考えたが、たとえば美しいものを目的としてがなくても勝手に体が動いてしまうようなものだ。だから、神は善なるもので、世界の第一原因、不動の動者としてとらえた。このアリストテレスの説はあまりにも（「いちおう」、というのが妥当な評価では）筋が通っていたが、キリスト教の創造説に矛盾する。そこでスコラ哲学が盛り上がった。

デカルトは絶対確実な真理にもとづいて学問を立てようとして、もとても考えた。神も世界もすべて疑って、その後に残った絶対疑えない自分の存在にたどり着いたが、そこで身体と心の関係が問題となり結局また、疑って捨てたもの全てを取り戻してしまった。

コメント [y16]: 最近、やたらとナショナリズムをあおるようなテレビ番組や本やウェブサイトやSNSの書き込みがありますから、本当に意識しておいてください。

コメント [y17]: そういう言葉が最近はやっているんですか？

神は善なのだから、自分をだますはずないという考えに至った。しかし、ここでマルブランシュは機械機会原因説を唱えた。これは身体と心の問題を解決しようとしたものでどういうものかという、心動け!というような思い、意思がきっかけとなってそれを神が知り、そして神が体を動かすというものだ。神が見つないでくれているのだ。以上が今回の授業の要点だ。

私はワールドカップなどを観戦して日本が勝てば当然のようにうれしくなる。しかし、よく考えればそこで活躍している人は赤の他人であって自分とは何も関係がない。日本という共同体の意識がそうさせていることに今回初めて気づいた。今、我々が当たり前だと思っていることでも、一度立ち止まって、考え直してみる必要がある。

コメント [y18]: それはよかったです。コメント y16 も参照。

情動とは、一時的な怒りや喜びなどをいう。また、知能には固定的という考えと可変的という考えがある。私は可変的な方が平等であり、良いと考える。しかし、両親が賢いと固定的であってほしいと思う人もいるし、逆の立場だと、可変的であってほしいと思う人もいると考える。私の両親は普通なので、どちらとも思わず、平等が良いので可変的が良いと考えるが、もし条件を好きなように変えられるのなら、賢い親がいて、知能が固定的であると、努力をしなくても良いので、固定的を望む。

コメント [y19]: 授業の内容と全く関係がありません。

デカルトは従来の哲学、スコラ哲学(アリストテレス研究)に不満があった。そこで「絶対に疑えない心理」をもとに、学問全体を作り直そうとした。このようにして方法的懐疑が出てきた。デカルトは「わたしはある」ということ以外すべてを疑った。つまり、自分の身体や世界があるということは、どうして証明されるのか。それらについてどうやって知ることができるのか、という考え方である。「わたしはある」というのは独我論といわれる。実在するのは私の心だけという理論である。心身問題は心と身体はどうして相互作用できるのかである。

デカルトは「わたしはある」だけは疑わなかったのが疑問点だ。方法的懐疑によればおいしいと思うのは思わされているだけかもしれないが騙されている「わたし」がいるのは間違いないということになる。しかし方法的懐疑に従えば「おいしいと思わされている私がいると思わされている」ということもあるのではないか。すべてを疑っているながら二段階の疑いはしなかった事が不思議だ。

マルブランシュは心身問題を機械機会原因説(occasionalism)で考えた。この考えは物理現象とはきっかけ(occasion)で、感覚は神が起こす。また意思もきっかけで、身体運動は神が起こす。普遍的な知識は神のうちにあり、というものだ。

自分の心の中の動きだけにより引き起こされた感覚も神によるものなのか。物理現象は目に見えるが頭で考えて心で感じることは目に見えないのでどうなるのか疑問だ。

コメント [y20]: 疑問を持った理由、自分なりの答えとそう答える理由を書きましょう。

今回の授業では宿題の答え合わせと補足説明、デカルトと心身健康の展開が主な題目であった。学生のコメントを再び読み返してみると、哲学は発展させても私たちの**成果地生活**に直接利益はもたらさないように思えることがあった。確かに、発展させても無意味な分野も存在する。新たな**原子元素**を作るとは正直私たちには何の利益をもたらしてくれない。しかし、それを誕生させることで他の問題を解決させることができるかもしれない。例えば、核融合が実現可能な粒子を完成させてしまえば、**エネルギー問題**は一発で解決できる。このように他の分野と組み合わせると新たな分野を作り出すこともできる。これらのことから、**やって無駄な学問はない**。

コメント [y21]: 残念ながら、新元素を作る研究からはエネルギー問題の解決に結びつくような元素は見つかりません。新元素を作る研究について、調べてみましょう。

また、後半では心身健康の展開について学んだ。マルブランシュは機会原因説を唱えた。これは、自分の意志、例えば目が乾いたから瞬きしたいと思うこと。そして、瞬きできるのは神が自分を動かしてくれるからである。このように、心で思えば神が動かしてくれる。心と体の因果関係がないことをマルブランシュは唱えた。

コメント [y22]: 実はそれは神話です。詳しくは山口裕之『「大学改革」という病』を読んでもください。

今回の授業では、宿題の小テストの復習から、「経験=実験」ということと、正解のない問題にも間違いはあるということと、政教分離は教会と国家の分離であり宗教と国家の分離ではないということを知りました。また、デカルトは神は善だと言ったということも学びました。

今回の授業から私が考えたことは、神が存在するのか存在しないのかということは**答えのない問題**であるということだ。

なぜなら、神の存在によって自然法則が存在する理由が納得のいくものになるが、**自然法則の存在は**、神の存在を証明するもの**では**無いからだ。

コメント [y23]: 気楽にそう断定する前に、これまでの人々が行った「神の存在証明」を具体的に学び、知りましょう。

デカルトは、従来の哲学に不満を持っていて、「絶対に疑えない真理」をもとに、学問体系を作り直そうとした。方法的懐疑で「わたしはある」という真理を得たが、その代わりに独我論や心身問題を**考えた引き起こした**。マルブランシュは機会原因説で、物理現象はきっかけで**感覚**は神が起こす、意思はきっかけで**身体運動**は神が起こす、普遍的な知識は神のうちにあると考えた。ライプニッツは、予定調和説で、物理現象は因果関係で展開し、

両者はそれぞれ独立に展開されているが、時間的に一致するように調整されていて、2つの時計がいつも同じ時間を指すようなものと考えた。

デカルトの存在するのは私の心だけという独我論に疑問を持った。確かに、自分の心しか存在しないと考えることは自信にもつながるし、大切にしなければいけない考えだ。部活の試合前でよく顧問から「周りのことは気にせず今、この空間には自分しかいないと思え。」と言われたのもその一例だ。しかし、存在するのは私の心だけという考えは悪くいえば自己中心的な考えだ。実際、この考えのせいで自分の国の利害関係ばかりを考えて、戦争や民族紛争が起きていることも事実だ。よって、独我論はいい意味でも悪い意味でもとらえることができるので、普遍的な考えにするべきではない。

コメント [y24]: 独我論は、デカルト的方法的懐疑の結論から論理的に帰結することで、「気の持ち方」とか、信じたり信じなかったりを自由を選べるとかいったことではない。

わたしは普段、神や宗教について考えたことはありませんでしたが、神の存在や死後の世界が存在しているかどうかにあつてのデータを見てみると日本は世界的に見てもそれら神の存在について否定的である珍しい国であるとわかりました。たしかにわたしの周りを見ると宗教や神への信仰が熱心な人はあまりいないですし、現にわたし自身も神の存在を意識したことはあまりないのでこのデータには納得できました。しかし現在、宇宙のはじまりで最も有力とされているビッグバンの説での何もない無の空間からある時、突然にもすごい大爆発が起きたというのを説明するためには神の存在は完全に否定することは出来ませんし、そう考えると日本人は目に見えない存在を否定して神の存在を認めていないのにビッグバンを支持するのは矛盾しています。

コメント [y25]: いる、いない、分からないがそれぞれ30%ということは、ほとんどの人がその場で考えて適当に答えた可能性があります。つまり、神に対して無関心だということです。

今回の講義は、前回の宿題の小テストの解説であった。私が一番印象に残ったのは、第8問の「哲学は私たちの生活に直接的な利益をもたらさないのではないか」というコメントである。確かに、経済学や法学は、私たちの生活に直接的に影響を与え、利益をもたらす。一方で、哲学は、不変の(普遍的な、というほうが適切)真理を追い求める学問である。昔の哲学者の思想を学ぶことが、私たちの生活を物理的に豊かにするとは考えにくい。しかし、このコメントに対しての返答でも書かれているが、人は利益のためだけに行動するのではない。私は、哲学は、利益のために学ぶのではなく、いろんな人の思想を通して、多様な価値観を身につけるために学ぶものであると考えている。また、物事の真理を、様々な観点から考え、追い求めることで、思考力が身に付く。思考力は、経済学や法学など、学問を学ぶ際に必要とされるものである。よって、哲学は、間接的に私たちの生活に利益をもたらす。

コメント [y26]: すべての学問は普遍的真理を求めています。

コメント [y27]: そう考える理由や根拠を書いてください。

授業の初めに、宿題小テストの回答解答と解説があった。その中の第 5 問の回答は「歴史的な事実を検証すれば、正解はあるはずですよ」というものだった。その解説として山口先生は、事実には正解がある。価値判断が基準となるものは正解が複数あるか、正解は一つではないとしても間違いは必ずある。」とおっしゃっていた点が印象に残っている。この話を聞いて、総合科学入門講座の餐場先生の授業回で取り上げられた、ナチスドイツのユダヤ人大量虐殺の事件が浮かんだ。当時使われていたユダヤ人収容所は現在負の遺産となっているが、当時の国民は指導者に扇動されて間違っただけとは思っていなかった。こうした事実と正しく向き合い知ろうとして、忘れないこと、そして「歴史的な事実を検証し、「正解」を見出すことで、(あるいは、少なくとも間違っただけの判断をしないようにすることで)」このような事件を二度と繰り返してはならない。

またデカルトについて、すべてのものを疑う方法的懐疑(窓の外を歩いている人々は、すべてロボットなのではないだろうか、そうでない保証はない、などの疑い)を唱え、「疑っている自分は存在している」という絶対に疑えない真理を解明した。次に「機会原因説」を唱えたマルブランシュは、感覚は神が起こすもので、意志を受けて人体の運動は神が起こしているものだと主張した。山口先生は、マルブランシュはデカルトの影響を受けたと仰っていたが、それぞれが影響を受けながらも新しい、また正反対ともいえる主張をしている哲学者もいて、それぞれの主張を知ることによって新しい考え方や視点を持つことができると考えた。

次の授業は、ライプニッツが唱えた「予定調和説」からである。また新しい視点の主張を捉え、理解するように努めたい。

ほぼ前回の小テストの解説であったが、上手いこと 6 月分の哲学の講義の復習になっており、過去に学習した内容を思い返すことができた。ここまでの情報を踏まえて、哲学というものは、特に身構える必要もなく、誰もが向き合える学問であると私は確信している。私はまだ、哲学という学問につま先だけしか触れていない身であるが、そう考えてしまった。なぜならば、哲学は私たちの生活の根本に深く関わっているからである。何気ない動作、行動、ちょっと考えたり、そんなことでさえ結び付けようと思えば哲学に結び付く。また、学校と名の付く場所で私たちが学習する学問は、哲学から発現派生している。このように、私たちと哲学は切っても切り離せない。一見、高尚で荘厳な雰囲気を漂わせる哲学、それはあまりにも身近過ぎるゆえに、哲学を避けていた人々が作り出した幻想(イメージ)なのかもしれない。といっても、実際哲学は高度な理解力を必要とすることが分かったので、難易度が高く手を出しづらいということは納得できる。

コメント [y28]: 偶然ではありませんよ。念のため。

コメント [y29]: たとえばどう結びつくのか、実際に結び付けて説明してください。

もうちょっと、授業で触れた内容に関連して書いてください。

今回の授業は前回の復習でほぼ終わった。哲学を非ヨーロッパ語(日本語)で学べることは素晴らしいことであるということ、法律なども日本語に訳して、裁判も日本語で行えることはすごいということ。また安倍政権の日本文化の素晴らしさを教え込む教育について、そうやって教え込むのではなく誇れるような国づくりをするべきであるという先生の意見や、ワールドカップで国中が盛り上がる件についての話を聞いた。

ワールドカップで盛り上がる件について先生は最初に、別に知り合いでも友達でもないのに...というようなことを言っていた。その時は「何かの行事で国全体が団結しているのはいいことで、しかもそれが一生懸命頑張っている同じ日本人を応援することなのだから、何がいけないのだろう。仲間意識を持つてはいけないのか」と反発感を抱いた。しかし先生のそのあとの説明で納得した。その仲間意識とはある意味では助け合い精神で、いいことである。しかし他方ではそれは「仲間がやられたらやり返す」といった考え方を生みだしてしまうという。日本軍が真珠湾を攻撃したことにより、そのことには何の関係もない沖縄の人たちが、ただ同じ日本人という理由だけで殺されてしまったことがその例の一つだ。こういったことを踏まえれば、真珠湾で仲間がやられたから同じ日本人を攻撃したアメリカ側の気持ちが理解できてしまうし、国民の仲間意識はいい意味ばかり持つものではないということも理解することができた。

ワールドカップなどは戦争がたくさんあった時代にあった国民の団結を、平和的なことで行うことができているからよいのではないかと考えたが、過剰すぎるファンが仲間意識が強すぎて喧嘩をするような話をよく聞くので、いいことばかりでないのだと知る

コメント [y30]: それが大切です。また、「いいこと」だと思っていることが、なぜ「いいこと」と言えるのかについても反省する必要があります。

哲学において「悟性」や「理性」がどのようなものであるのか、また哲学者が考える「理解」とはどのように言い表されるものであるのか、具体的な理論は文献として今現在に伝えられてきている。その過程には翻訳も行われ、近代哲学の典型的な理論体系は後世に伝えられてきた。このように沢山の文献が残されてきたわけであるのだから、「英語訳された哲学文献の方が理解しやすいのはなぜか」といった疑問には、訳語を行った人物がどうしてそのような訳語にしたのかを説明できる文献がそろっていれば解明できる。言わば、歴史的事実が検証されると、歴史文献が残っていると、それらに関連する問題に正解はあるということである。「答えのない問題に挑んでゆく」という現在現代社会のセオリー=決まり文句は、何でもかんでも「思い付きの答え」を示せばよいということではなく、「正解のな

い問題には、不正解は少なくとも存在する」ということををわきまえる必要があるである。これまでの授業コメントで私が示してきたように、今も昔も「合理的」に、「理性的」に問題を検証していくという姿勢は変わらないということだ。

古代ギリシャから近代にいたるまで、「神」の存在証明は議論され続けてきた。アリストテレスは、神を「世界の運動の第一原因」とした。人間がモノを動かすとき、モノを動かした原因は「人間」によるものである。同じように、世界が「動いている」(地球は周り、星も空も動いている)原因は「神が動かしているから」とアリストテレスは定義した。しかしキリスト教にとって神は「世界の創造神」であったはずであり、アリストテレスにとっての神の定義に反することとなる。

アリストテレス研究に対してデカルトは、そもそもの学問体系を作り直そうとして、絶対に疑えない真理「わたしはある。:Je suis.」と定義を発見した。所謂心と身体は別々のモノであり、心が「考える実体」であるということであった。しかし再びその結果、問題となって議論とされたことは、「心と身体はどうして相互作用できるのか」ということであり、「わたし以外に目の見える人間は本当に人間なのか、それともわたしは夢を見てこの世界こそ存在しないモノなのか、神は悪であるのか」という数多くの疑問だった。実在するのは私の心だけだか(独我論)という定義が疑われ主張もされた。徐々に心身と神の関係はどのようなものなのかという議論が展開されてくる。これが心身二元論の始まりだった。

公理素とは公理と推論規則から導き出される定理の体系。アリストテレスの神の理論は世界の第一原因で、不動の動者。創造新というキリスト教の教義と矛盾。デカルトは絶対に終えない真理=私はある。世界の実在性、心と身体の関係が問題に。また、ポテンシャルがアクチュアルに変わるのがこの世界の動き。デカルトは神は善だから私を疑うはずがないといった。

今回の授業は、前回の復習小テストの解説が主だった。

次に、マルブランシュの機会原因説(occasionalism)について学んだ。機会原因説とは、心と身体は別次元のものであり、物理現象はまず心が「身体動け」と思い(occasion)、感覚は神が起こす。つまり、意思はきっかけであり、身体運動は神が起こす。

今回の講義を受けて考えたことは三つかある。

コメント [y31]: 違います。アリストテレスの神は「自らは動かずに、他の物を動かすもの」です。つまり、物は動かされているのではなく、神を目的として物が動いているということです。

一つは、先生がおっしゃっていたように、自分の親戚でも友人でもないのに日本に対して誇りを持つのは不思議なことである。例えばサッカーの試合では、同じ日本人ではあるが赤の他人である選手がゴールを入れるとものすごく喜ぶ、ということがあげられる。実際に私も、なぜこんなにワールドカップが盛り上がっているのか理解できなかった。しかしそれが盛り上がる根底の部分には、**近代国家プロジェクト**で作り上げられたものがある、ということに納得した。また、このようにワールドカップで盛り上がっているのは日本に限らずほぼすべての国で起こっている現象なので、国が違っても**サッカー**が人気である、ということには変わらないんだなと思った。

二つ目は、小テストの五問目の解説にもあったが、「英語の解説はなぜわかりやすく感じた。これは一体何故なのだろう か。私は二つの仮説を考えた。...おそらく私があげた説の中に正解はないだろう」という問いに対し、事実の問題に対しては答えがあり、正解がなくても間違いはないという考えに納得した。現在の世の中ではよく「正解のない問い」という言葉が充満している。しかしそういった言葉が充満しているために、単なる思い付きのものが許されるような風潮がある。私もこのような風潮に違和感を覚える。

しかし、実際のところ正解のない問いというものは一部存在する。具体的に言うと生命倫理の問題である。代理出産による女性の体の道具化の問題や出生前診断・選択的中絶の問題など、一部人によって**答えが異なるケース**は実際のところ存在する。だが、大半のことには正解というものは存在するし、仮に正解がなかったとしても間違いというものは存在する、という考えに賛成だ。

三つ目は、小テストの第八問目の「経済学や法学といった学問と違い、哲学は発展させても私たちの生活に直接的な利益はもたらさないように思えてしまうのです」という問いに対する**答え**に、人は利益のためだけに行動するものではないという**答え**に賛成だ。なぜなら、人間は自分の好きなことに対し、お金を払ってまでも手に入れようとするからだ。例えば、趣味が写真を撮る人であれば多額の金額を払ってまでもカメラを手に入れようとするからだ。

先生も講義でおっしゃっていたように、人間が行動するのは、利益のためだけではなく、自分が不利益を被らないようにするために行動するという意味もある。知らずに損をすることはたくさんある。例えば、授業料免除という制度があることも知らずに、免除しても耐えるチャンス逃し、全額払ってしまう、というケースがあげられる。このように、「知らない」ということで、損をすることもある。また、「知らない」がために、知らず知らずのうちに人を傷つけてしまうことがある。このようなことがあるため、自分の利益のためだけではなく、周りに迷惑をかけたり、自分が不利益を被らないためにも学ぶ・知ることが大切である。

今回の授業を受けて、私は以上の三つのことを考えた。

コメント [y32]: 具体的にどういうものを作り上げたのか書いてください。また、そもそも「近代国家」とはどういうものなのかも説明してください。

コメント [y33]: 近代スポーツはほぼすべて、19世紀~20世紀初頭に、「近代国家」が形成され強化されると並行して、主に学校教育の中で作られました。

コメント [y34]: 「答えが異なってもよい」と考えられているからそうなっているのです。「答えを一つに決めなければならない問題」も多数あります。答えを一つに決めなければならないのに、「正解はない」などと言っていると、力のある人の考えを押し付けられることにもなりかねません。

コメント [y35]: コメント y14 が付いている学生のコメントも参照。

授業まとめ

今回の授業では、アリストテレス、デカルト、マルブランシュについて学んだ。

まず、公理系とは、公理と推論規則から導き出される定理のことである。

次に、アリストテレスの神の理論についてである。アリストテレスは世界の第一原因を神と考えた。さらに、神は不動の動者で、永遠にして善なる生者とした。これは、「創造神」というキリスト教の教義と矛盾することになった。

デカルトは、これまでのアリストテレス研究であるスコラ哲学に不満を持ち、自分から「絶対に疑えない心理」をもとに、学問体系を作り直そうとした。それは、方法的懐疑というもので、絶対に疑えない真理として「わたしはある。」とした。ここで、デカルトは、実在するのは自分だけであるという独我論に達したが、この時に、心と身体の相互作用の関係についての問題が浮上した。

心身問題の展開として、デカルトに続いてマルブランシュが機会原因説を出した。マルブランシュは、物理現象はきっかけで、感覚は神が起こす。また、意志はきっかけで、身体運動は神が起こす。さらに、普遍的な知識は神のうちにあるとした。

意見・質問

マルブランシュは普遍的な知識は神のうちにあるとした、とありました。公理が導き出されるのは、物理現象のきっかけも神が動かしたものであり、神が物理現象の法則に従うように動かしているからということでしょうか。これは、普遍的な知識を神が持つならば、物理現象が法則に従うように神が動かすことができます。しかしここで、意志というものは、絶対に疑えない真理であるわたし一人の人間のものであると**思った**のですが、この**意志**におけるきっかけにも神が作用しているのでしょうか。それとも、きっかけである意志と、神の作用は切り離して考えられるものなのでしょうか。もし、きっかけである意志にも神の意志が作用するとしたら、この意志のきっかけにも法則に従うようになっていると考えました。

コメント [y36]: なぜそう思ったのか、理由を説明してください。

コメント [y37]: 意志は、適当に決めるのではなく、必然的に決めるものです。

今回の講義は、小テストの答え合わせとアリストテレスの神の理論、デカルトの心身問題について主に学んだ。

アリストテレスは、世界は運動でみちているが、何故、誰が、それを動かす原因はなんなのかと過去に原因を探していくことで、自らが動かずに他のものを動かす最高善の神が世界の運動の第一要因とした。

デカルトは方法的懐疑で、全てのものは疑わしいが、疑っている私の存在だけは正しいとした。また、そこから実在するのは自分の心だけという独我論や、**どうして**心と体の相互作用できる**のか**という**考え方の**心身問題なども発展した。しかし、デカルトはそれらに

について証明回答することができなかつたために、世界の实在性や心と体の関係が後に問題になっていった。

心身問題が展開していくなかで、マルブランシュはの機会原因説を主張が発展した。これは、普遍的な知識は神の中にあり、物理現象や意思はきっかけで、感覚や身体運動は神が起こすものであるという考え方だ。この機会原因説はデカルトが投げ出した心身問題について補足している。

授業コメントと対応にあった「社会学で主観的事実と客観的事実について学んだ」というコメントに対して「really(本当らしさ)と Truth とは、必ずしも一致する概念ではありません。」とい答えてらっしゃるのを見て、その通りだと私も考える。なぜなら、以前授業で習ったとおり、正しさというのは人それぞれであり、自分の中では善だと思ってやったことが、他者からしたら悪だったりと善悪や正義非正義などの価値観はやっぱり人それぞれである。 いずれにせよ、正しさは普遍を目指すのである。価値観が違っている人たちを排除しようとすると宗教戦争やテロなどが起こる。これは自分自身の思い込み、いわゆるドクサによってこういう行為が起こってしまう。新しい話を聞いても、自分のドクサに取り込んでしまう人が多い。そこで、自分の常識を否定するような事実や主張について理解するようにする、それが異文化理解であり、他者理解なのである。

カントの分析命題は絶対に正しいものである。しかし、それゆえに知識が増えることはあまりない。心身二元論とは心と体は別物だという考え方である。英語では物体=body である。物体が広がりを持つかどうかは経験的に学ばなければならないが、物体のあり方そのもの定義は経験によるものではない。公理系とは公理と推論規則から導き出される定理の体系のこと。アリストテレスの神は世界の第一原因、不動の動者、永遠にして善なる生者である。しかし、これはキリスト教の創造神という教養と矛盾している。デカルトは「絶対に疑えない真理」をもとに、学問体系を作り直そうとした。そして、実在するのは自分の心だけである。「わたしはある。」という ことは真理だという懐疑を生む結論に達するが、心と身体はどうして相互作用できるのかという問題に至ってしまった。心身問題の展開として、マルブランシュの機会原因説がある。物理現象はきっかけ occasion で感覚は神が起こし、意志はきっかけで、身体運動は神が起こし、普遍的な知識は神のうちにあるという、物事の原因は神によるものだという考えである。

断片の寄せ集めのようになっています。それぞれの内容の関連やつながりが分かるように書きましょう。

コメント [y38]: 以前、授業では全く反対のことを教えたつもりです。つまり、「好み」は人それぞれでもかまわないが、善悪や正義非正義は人それぞれではないし、人それぞれだったら困ります。

今回の授業では心理学における概念の登場について学んだ。その前に、前回の授業の小テストの解説があった。その中で自分が本当にあっているのかという疑問点などが少しあったので、調べたりして自分なりの意見を持つべきだと確信した。

ほかにも、自分が気になったりしたことなどはすぐに調べる習慣を身に着けるべきだと気づいた。

コメント [y39]: そのような話は全くしていませんが、何か他の授業と混同していませんか？

今回の授業では、思いを起点に、神の意志により、身体が動くという考えを知った。これだけ聞いてもまったく意味が分からなかったが、確かに、当時の科学では意識と身体

小テストの振り返り

第一問 「すべての物体は広がりをもつ」という定義はデカルトによる物体の定義である。また、個々の物体が広がりを持つかどうかは触って見ないとわからないが、そもそも「物体というものは広がりを持つ」という定義がなければ、触って確かめようにも、何を確かめるべきかなのかわからない。

第二問 もし、英語のニュアンスが理解できていなければ、日本語と英語でニュアンスが異なること自体認識できない。よって、その場合、英語のニュアンスを日本語を通じて理解してしまっている。

第六問 「徐々に哲学用語を日常生活に浸透させなければいけない」というコメントに対して、学術用語を日常生活にわざわざ浸透させる必要はない。もし、必要であったなら知らないうちに浸透しているだろう。

第十問 帰納法が普遍に至ることができない理由は「少しずつ結果が違う」というところではなく、「今回と同じ結果が次回も出る保証がない」というところにある。

今回の授業内容

心身問題の展開

マルブランシュの唱えた「機会原因説 occasionalism」では、「物理現象はきっかけ occasionalism で感覚は神が起すものである」や「意志はきっかけで、身体運動は神が起すものである」と述べられている。また、「普遍的な知識は神のうちにある」とも述べられている。

コメント [y40]: それだけ言ったわけではなく、そういう考えがどんな問題を解決するために提出されたのかを説明したうえで取りあげました。
ちなみに、現在の科学でも意識と身体つながりについてはほとんど何も分かっていません。

ライプニッツの唱えた「予定調和説 preharmony」では、「物理現象は因果関係で展開し、心の現象も因果関係で展開する」と述べられている。また、その両者はそれぞれ独立に展開するが、時間的に一致するように調整されている。それは二つの時計がいつも同じ時間を指すようなものである。

今回の授業は前回の授業の振り返りをして、物理現象や意志などはきっかけとして起こり、身体的運動や感覚は神が起こすものとしてマルブランシュが機械原因説を提唱したこと、ライプニッツは予定調和説によって物理現象は因果関係で展開しているということであった。

「人は利益のためだけに行動しているわけではありません」というところに疑問を持った。自分の利益のためではない行動として人助けが例にあげられる。公共交通機関において優先席対象者に対しては席を譲るとするのは一見よい人助け、又は思いやりのように思われる。だが、席を譲る行為によって自分が風評的に良い目でみられるという利益が潜在的に含まれていることをわかっているのではないだろうか。自分が優秀な人材であることを周りに知らせるために人のために役立つことをしているのではないだろうか。

学生へのコメント返信の「母国語で教育を受けられる～」に関連し、W杯を例に挙げなぜ同じ日本人というだけでそこまで応援したり感動したりするのかという先生のお話に共感しました。

確かに、同じ国籍と言うだけで必死になって応援する必要はないと常日頃から感じていました。

同じグループに所属している人間を無意識に応援してしまうのは群れないと死んでしまう生物としての本能でしょうか。

公理とは、物事的前提であり根拠はない。それと違って、定理とは、公理を出発点として、推論規則で到達できる命題である。つまり、公理があつて定理が成り立つ。問題を解くときに、正解がないと言つてはいけない。論理的に考えれば大体の問いには正解があり、事実に関することには基本的に正解がある。価値判断には正解が一つだけではないかもしれないだけで、正解がないわけではない。また、正解がない問題であっても、間違つた答えはある。哲学用語のような難しい言葉は、世間に浸透する必要があるはずでして、

コメント [y41]: 「～ないだろうか」は、「思う」「感じる」などと同様に、根拠のないことを書くための表現ですから、やめましょう。

ちなみに、そんなことを考えて人のために役立つことをしている人は、かえって評判を下げますよ。

コメント [y42]: 話のどういう点にどうして共感したのか説明してください。

コメント [y43]: 違います。

あえて浸透するように動く必要はない。全員が当たり前だと思っているなかで、違うのではないかと気づくことが大事であり、それが利益につながることもある。人は利益のために動くのではなく、楽しいと思うことで行動を起こす。

デカルトは、神は世界の第一原因であると考えたアリストテレス研究へ不満を抱き、学問体系を作り直そうとした。デカルトははじめ、神は自分をだましており、周りのものはすべて嘘なのではないかと疑い、しかし、考えている私は確かに存在しているという方法的懐疑を説いた。しかし、最終的に、神は善として存在しており心身は一体だと認めた。

マルブランシュは、デカルトの本を読み機会原因説を説いた。マルブランシュは心が思うことがきっかけとなり、神が感覚をつないでくれるとした。

デカルトは全ての事柄において疑問を持ち、その疑っている自分が存在することは確かであることから、「私はある」と考えた。デカルトは全てを疑うことから始めたのに、神は存在しているとし、神の言うことは正しいと考えたため、デカルト自ら疑った全てが神によって正しいとされた。神が存在するという考えが方法的懐疑の考え方を一気に変えたと言える。

また、デカルトの考えに感銘を受けたマルブランシュは機会原因説(occasionalism)を唱えた。機会原因説とは、思いがきっかけ(occasion)で、その思いが神に届き、神が体を動かすという考え方である。これは神の言っていることは正しいと考えるデカルトと非常に似ている。感銘を受けた人物の考えは引き継がれる。

日本語が日本中で通じるのは、明治政府のおかげである。もし明治政府が全国共通語を作らなければ、日本の中でも言葉が通じないということが起こっていただろう。例えば、東北の方言と九州の方言では全然違うため、お互い何を言っているのか分からない。沖縄や北海道でも同じ現象が起きてしまう可能性があったに違いない。

最近の講義を通じて、人の感覚や運動の原因を追究する人々がいたことを学んだ。

アリストテレスは神が運動の第一原因だと考えた。第一原因とは自らは動かずに他が動く原因となるものであり、それには美しいものや善なるものが当てはまる。ゆえに、その最上である神こそが第一原因であると考えた。これは一見キリスト教的に見えるが、アリストテレスは「世界や宇宙、時間には始まりも終わりもない」とも述べており、キリスト教における世界の始まりを否定している。

またマルブランシュは、身体の運動は神によって起こされるものであると唱えた。外からの物理的な刺激や意志をきっかけとして、感覚や運動そのものは神によって起こされる。

コメント [y44]: 田中克彦『ことばと国家』岩波新書を読んでみましょう。

コメント [y45]: 自然科学とはすべて「原因」を追究するものです。

心と身体が互いに作用しあうことについては、マルブランシュ以前にも問題として取り上げられている。デカルトは心と身体は二つの異質な実体であると考え、それにもかかわらず相互に作用することについて説明しようとした。

今回の授業は前回の小テストの解説を主に行った。

デカルトによる物体の定義では「すべての物体は広がりを持つ」とされ、この命題は経験的なものではない。ちなみにここでいう「経験」は個人による体験ではなく実験によってわかることを指す。前者は個人によって異なるが後者はある程度の一貫性を持つ。しかしこの実験などの帰納法は「今回も同じ結果が次回も出る保証がない」という点で普遍に至ることはできない。心身二元論では心と体は別の実体であり、質量がゼロである精神はエネルギーを持たないため体へ影響を与えることはできないとしている。しかし実際は考えれば体を動かすことができるし体に物が当たれば痛みを感じる。このことについてデカルトは論理的な根拠を示すことはできなかった。また彼の後に現れたマルブランシュは機会原因説(occasionalism)を唱え、物理現象はきっかけであり神が仲介となって身体と心を結び付けているとした。

明治の先人たちの成果を自分の誇りとするコメントについては私たちが自然と共同体の一員であるという意識が根付いていることが原因だった。これはスポーツなどで顕著に表れ今行われているサッカーワールドカップでも多くの国民が自国のチームを応援しその姿を国民が一つになっていると表現される。この共同体意識は時に戦時の日本のような国家のために国民が先導される事態が危惧される。

総合科学入門講座でも出た言葉だが「正解のない問題」はどんな回答も当てはまるということではない。正解はなくとも間違いは存在しなくても思いつきを通るというわけではない。また本当らしさ(reality)と真理(truth)は必ずしも一致するものではなく前者には主観と客観が存在しうる後者にはない。感官においても、外見が犬に似ている猫がいてそれを主観的に犬だと判断してもそれ自体が猫であるという真理が変わることはなく感官が誤ったということになる。

私は、今回の講義は欠席した。そこで、友人から先週の復習を重点的にしたと聞いたので、そのことについて書いていく。

まず、正しいとは証明されていない公理と公理から推論規則で到達できる定理について知った。ゲーテルは、無矛盾で完全な「公理系」というものがないということについて言及証明した。次に、西欧思想の神について学んだ。自然科学というものは、神が法則や倫

コメント [y46]: 「自然と」ではなく、明治政府が「国民意識」を植え付けるためにさまざまな政策を取った結果、「国民は共同体」という意識が作り上げられた。

コメント [y47]: 先週の内容という意味ですか？授業ファイルはウェブに掲載しているので、それを見てください。

コメント [y48]: 具体的にどうということなのか、調べてみましょう。

理、数学で創造したと考えられたことにより成立した。世界の運動が無限の昔から今に伝わっていることはあり得ないので、有限の昔に第一原因としての神であるとアリストテレスは考えた。しかし、神自身は動いていないので、運動が起こるのはおかしいのではないかとアリストテレスは気付いた。このことを考えていく中でアリストテレスは、美こそが運動の原因であると示した。最後に、存在論について学んだ。存在しているということは理解できるが、アリストテレスは言葉で示されたものは少しずつ異なるために存在しないとした。

私は、この学んだことの中で自然科学について疑問に感じたことがある。それは、神が法則や論理、数学に基づいて世界を創造したということだ。資料にあった日本時の宗教観についてのグラフで日本は、神の存在、死後の世界は存在しないと考えている人がグラフの中で 3 番目に多かった。日本人のほとんどの人が神の存在を信じていないということが見てわかる。前に述べた通りの理論であれば、私たち日本人において自然科学は成立しないのではないだろうか。自然科学は、私たちの多くが信じているので、必ずしも神の存在を信じていなければならぬというわけではない。だから、自然科学についての考え方を改める必要があると私は考える。

今回の授業では、前回のまとめと心身問題について学習した。アリストテレスの神の理論は、最初の原因は「自分は動かずに他のモノを動かしており、かつ他のモノの目的となる」として、そこから神の概念が生まれた。神は世界の第一原因であり、神は何らかの生命である。また、永遠にして善なる生者とした。そして、全てのモノには potential があり、それが actual 化していくことが世界の変化であるとした。デカルトは「絶対に疑えない真理」=「私はある」という所から「世界はあるのか」という所まで行きついて、そこから、神は善であるとして神の証明をして、全て疑ったことを取り戻した。世界の実在性は心と身体の関係が問題になった。それからマルブランシュは、心は体と別であるとした。物理現象や意志はきっかけであり、そこから生じる感覚や身体運動は神が起こすものである。普遍的な知識は、あくまで神のうちにありとす。

デカルトの方法的懐疑では、疑い続けて「世界はあるのか」というところまで行きついた。確実なものを見つけるまで、疑い続けたのである。しかし、疑い続ける上で「神」というところに少しでも触れて、批判が起きなかったのか。西洋近世哲学、キリスト教神学を研究している東洋大学の坂本邦暢によると、批判した者の一人にギスベルトゥス・ヴォエティウスがいて、その人の批判のよれば、不都合が三つある。

「第一の不都合は、たとえ一瞬でも神の存在を疑ってはならないという原則に懐疑が反するというものである。第二に、懐疑を脱してたしかな信仰に到達する保証がないという危険性である。最後に第三の不都合として、新しい方法により自然神学が不可能になり、

コメント [y49]: 歴史的事実として、日本では自然科学が成立しませんでした。現在の日本において科学研究が行われているのは、明治以降に輸入したからです。

コメント [y50]: デカルトの『省察』という本には、当時の識者による反論とそれへのデカルトの応答が付いています。

無神論者に対抗するもっとも有効な武器が奪われてしまうというものがあった」(坂本邦暢「デカルトに知られざる神-新哲学とアレオパゴス説教」、『白山哲学 東洋大学文学部紀要 哲学科篇』、pp.65-81、2018.)。結果として、デカルトは無神論者に対抗するモノを奪うとして批判されていた。

コメント [y51]: それで、どうなったのですか? どんなことについても批判者はいますから、批判の結果、デカルトが主張を変えたとか、迫害されたとかいったことがないならば、批判者がいたからといって、それだけではどうということはありません。

まず、小テストの復習をした。日本語で哲学をすることは難しい。ドイツ語やフランス語で授業をしても、理解する人が少なかったため、明治時代に日本語に翻訳される作業が行われ、日本語で授業が行われるようになった。

正解がない問題でも間違いはある。事実の問題には必ず正解がある。

哲学用語を日常生活に浸透させなければならないというコメントに対しては哲学用語は必要ならば自然と世の中に浸透するはずであるので、浸透させなければならないという訳ではない。また、哲学は楽しみを提供する点で役に立つ。私たちがテレビや音楽をお金を払ってまで楽しもうとすることと同じだで、利益を得るためにやるものではない。哲学をして得られる利益はみんなが当たり前だと思っていることに疑問を持ち、立ち止まって考えることができることである。経済学や法学など哲学は利益を得るためというよりかはむしろ、不利益にならないためにするものである。

次に前回のまとめをした。公理系とは出発点である公理と次のステップに進むためのルールである推論規則から導き出される定理の体系である。アリストテレスの神の理論は目的がこの世界を動かしているというものであり、土が下に落ち、煙が上に上るように、本来の場所にもものが動くということを示す。つまり、すべてのものはポテンシャルを持っており、誰かが意図的に行動しているのではない。よって「創造神」というキリスト教の教養と矛盾し、キリスト教を捨てることもできなかったため、中世で盛り上がった。デカルトは絶対に疑えない心理=私はあるとした。よって「世界はないのではないか」という問いを否定出来なくなってしまった。しかし、「神は善だから嘘はつかない」とし、神が実在するということは世界が実在するということであるとした。よってデカルトは疑って捨てたものをすべて取り戻した。

マルブランシュの機会原因説は心が体を動かそうとする思いを神が検知し、神が体を動かしてくれるとした。これはデカルトと似ている。

話した内容をまんべんなく書いていますが、そのために断片の寄せ集めのようになっています。それぞれの内容の関連やつながりが分かるように書くとよいでしょう。

「社会学で主観的事実と客観的事実について学んだ」というコメントに対して「reality

と truth は一緒とはいえない」という解答に対して私も賛同する。なぜなら正しさは人それぞれ異なるからだ。自らのものさしで測ったものが必ずしも全ての人にも共通しない。これはこれまでの学習で習ったことだ。それぞれ異なる価値観をもつ我々は自分と異なる者を否定することがしばしばある。その結果が戦争ではないか。すべてを認め合うことは難しいが相手の全てを否定するのではなく、一部分でも理解しようとする姿勢が必要だ。異なる価値観を少し向き合うことから平和ははじまるのではないか。自分の作った世界の中で物事を判断してはいけない。私たちは日々変化していかなければいけないのだ。

コメント [y52]: これまでの授業ではそれと全く反対のことを教えたつもりですが。つまり、正しさは人それぞれではない。

今回の講義は、宿題の小テストの答え合わせとデカルトについてであった。

まず、宿題の小テストで答えがすべて1だったのに驚いた。また、第6問で「徐々に哲学用語を日常生活に浸透させなければならない」という事に対して、浸透させる必要はないという答えをしていた。確かにその通りだ。なぜなら、哲学の知識を取り入れなければ、生活できないというわけではないからだ。ただし哲学の知識を取り入れることは、西洋の思想を理解するきっかけとなるものなので、グローバル化が進むこの社会で哲学の知識を取り入れることに価値はある。

コメント [y53]: やった時に気づかなかったのですか？

次にデカルトについてだ。デカルトは従来の哲学に不満を抱いた。「絶対に疑えない真理心理」をもとに学問体系を作り直そうとした。方法的懐疑についてはいまいちわからなかった。

コメント [y54]: 具体的にどこがどうしてわからなかったのか書いてください。

次の授業でマルブランシュやライプニッツについて分かるようにしたい。

コメント [y55]: デカルトはもういいのですか？

哲学用語は広めていこうとして広めるものではないので、別にわざわざ浸透信仰させようとする必要はない。重要な言葉であるならばもうすでに広まっているのである。

哲学は経済学などとは違って利益が得られないという人がいるが、その考えはおかしい。決して人は利益のためにだけにいつも行動しているのではない。例えば、音楽を聴くとき、映画を見るとき、ゲームをするとき。人は利益のためにそのようなことをとっているのではない。ただ面白いから、楽しいから行動する。不利益のためからの行動のほうが多い。だから、哲学をすることに対して利益を求めることが正しいとは言えない。

コメント [y56]: 楽しみを得ることも重要な利益であり、哲学は楽しみという利益を与える、と言いました。

アリストテレスは、世界は目的によって動いているという目的論的世界観の下で世界の運動を説明しようとした。すべてのものはポテンシャルを持っており、それがアクチュアルのものになる。トリの卵は必ずトリになるといったようなことである。アリストテレスの考えは理論がしっかり組み合わせられている。アリストテレスのこの考え方は、創造神というキリスト教の教義とは対照的である。アリストテレスの考えもキリスト教の考えもど

ちらも納得のいくものであり、無視できないので、当時のアリストテレスの思想が導入された13世紀以降の西洋社会は大変盛り上がった。

こののちにデカルトが世界の実在性や心と身体の問題にした。彼は、世界はないのかもしれない、でも私はある、という考えだった。しかし神は善だから私を疑う欺くはずがなく、原因不明でも心と身体は一致すると考えた。

デカルトは、心と身体はそれぞれ別の実態であり、因果関係は持ちようがないものとした。しかし心は思うし、身体は動く。よって、思いがきっかけとなり(occasion)、それを神が感知することで、神が自分の身体を動かしてくれるのだという考えにたどり着いた。しかしそののちにライブニッツが登場し、それはおかしいとデカルトの考えを否定するようになる。

今回の授業では、前回の授業の宿題だった小テストの復習を主にした。「日本人が英語を日本語に訳すときにニュアンスが変わるときがある」ということに対して、日本語の「頑張れ」という言葉と、英語の「Take it easy.」や「Do your best.」という言葉では微妙にニュアンスが違っているが、誰かを励ますような場面で使われる。この微妙なニュアンスの違いは英語と日本語の両方の意味を理解しているからこそであり、理解出来ていなければニュアンスの違いも理解出来ないはずである。

「本当は猫なのに外見が犬なら、感官が直感的に犬だと判断する」ということに対して、感官は誤るときもあり、実際は猫であるということ学んだ。

「日常生活に学術用語を浸透させてなければならない」というコメントに対して、学術用語はあえて浸透させる必要はなく、必要があれば広がる。

「哲学は発展させても私たちの生活に直接的な利益はもたらさないように思える」ということに対して、人は利益のためだけに行動しているのではなく、実際に私たちも音楽や映画など、好きだから行動することもある。

コメント [y57]: 楽しみを得ることも利益だと言いました。

really 本当らしさ、truth 真実とは必ずしも一致しない。正しさというのは人それぞれであり、自分の中の善は他人にとってはぜん善でないかもしれない。価値観は人それぞれである。しかし、価値観と一口にいてもやはり正しい知識から導かれる価値観でないと価値観とは呼べない。正しい知識を身につけないと、戦争などに発展してしまう。いわゆる思い込みによるドクサにつながってしまう。やはり価値観を形成するにも正しい知識が必要だ。

コメント [y58]: これまで全く逆のことを教えてきたつもりですが、残念です。

私が今日の講義で考えたことは、**ライプニッツの予定調和説**についてである。
デカルトもぶつかった心身問題について、ライプニッツは心の現象も因果関係で展開すると唱えた。

物理現象が因果関係によって展開するという点については、科学などがそうであるように理解することができるが、心身問題も同じように因果関係によって展開するという点については疑問を持った。

その疑問というのは、因果関係についてのことである。この因果関係というのは、例えば仕事で上司に怒られ、辛いと感じた。だから胃が痛くなったというようなことなのか。

私は例に挙げたものが答えであると考えた。

しかし、これは現代の視点から見たときの考えであり、この時代の思想には神が関わっていることが多い。

神が人間の心身問題に関わっているという考えになれば、私の出した例は**予定調和説の例**に適さないのではないかと考えた。

予定調和説の例として挙げられるものを何か一つ教えていただきたい。

今回の授業では、前回の授業の復習をした。

まず、公理とは前提として設定したものであり、証明することはできないが、直観的に正しいものである。公理と推論規則から導き出されるものが定理であり、その体系が公理系である。しかし、授業のなかで公理系が正しいとは限らないことを証明したゲーデルの不完全性定理というものがあると聞き、公理は直観的に正しいということに納得していたので、不完全性定理がどういうものなのか気になった。「不完全性定理は、『**自然数の理論を含む公理体系が無矛盾であれば、その理論に属し、肯定も否定も共に証明できないような決定不能命題(unentscheidbarer Satz)が存在する**』』という内容をもち、またこの定理はその系として、『**自然数の理論を含む公理体系が無矛盾ならば、その体系の無矛盾性の証明はその体系の中では不可能である**』(山岡悦郎「ゲーデルの不完全性定理」による)。この記述を読んでも『**無矛盾**』とはどういったことをいうのかわからず、調べてみたもののきちんと理解できなかった。ただ、私は公理系が証明できないものならば、それがその**真偽も証明できないような命題**が存在し、矛盾がない中で矛盾がないということは証明できないということであると**解釈**した。

次に、アリストテレスの神の理論は、神は世界の第一原因としている。まず、ものはそれ自身だけで動くのではなく、何かに動かされるものであり、ずっと動かし続けるためには動かしているものと一緒に動くはずだ。しかし、地球も含め、宇宙に存在しているもの

コメント [y59]: 前回の授業では取りあげませんでした。

コメント [y60]: 自分の頭から取り出そうとするのではなく、調べてみましょう。

コメント [y61]: 「矛盾 inconsistent」とは、要するに「Aであり、かつAでない」ということ。これを許容すれば、どんなむちゃくちゃな命題でも証明できてしまう。無矛盾 consistent とは、ある公理系がそうした矛盾した命題を定理として含まないということ。

コメント [y62]: 「この命題は偽である」という命題。
不完全性定理とは、簡単に言うと、「矛盾を含まない公理系には、真偽を証明できない定理が含まれる」ということ。

コメント [y63]: どのような根拠でそう解釈したのか説明してください。
ホフスタッター『ゲーデル、エッシャー、バッハ』(白揚社)を読んでみよう。

は誰かからの力を受けて動いているとはいえ、最終的に不動の動者である神がこの世界を動かしているという結論に至った。たしかに、どうやって動き始めたのかは謎だが、一度動けば宇宙空間は真空状態であり、摩擦が起こることはないので動き続けているのである。

参考文献

1) 山岡悦郎「ゲーデルの不完全性定理」,

[file:///C:/Users/takedamachiko/AppData/Local/Packages/Microsoft.MicrosoftEdge_8wek9b3d8bbwe/TempState/Downloads/AN100450900030002%20\(1\).PDF,2018/7/9](file:///C:/Users/takedamachiko/AppData/Local/Packages/Microsoft.MicrosoftEdge_8wek9b3d8bbwe/TempState/Downloads/AN100450900030002%20(1).PDF,2018/7/9)

コメント [y64]: これはあなたのパソコンのディスクですから、参照できません。

認識論と存在論の内容の違いをこの授業を通してしっかり理解できてきた気がする。この授業をとることがなければ高校での倫理程度の学習しかしていなかった。哲学・思想の授業をとってよかったと今になって思った。なにも哲学についてわからないまま生きて行くよりも、知っているが使う必要がない生き方の方が充実するだろうしかっこいい。哲学用語は正直難しく、哲学者の名前も多くてわからないが、アリストテレスやデカルトは先生のお口から何度も聞いたので、これからの人生で忘れないだろう。あと数回の哲学、寝るまを惜しんで聞いてみたい。

コメント [y65]: 存在論についてはまだ十分扱っていませんが。

学んだ具体的内容を書いてください。

前回の小テストで、ずっと答えが一番だったので、最終問は論文を読ませるために変えてくるだろうと思い、上からじっくり読んだのに、結局答えが一番で少しショックだった。しかし、問一の答えが一番、問二の答えが一番、問三の答えが一番、と続いたから次の答えも一番だろうと考えるのは帰納法なのだと身をもって理解することができた。そして、帰納法が普遍に至ることができない理由は今回と同じ結果が次回も出る保証がないというところにあるのだと分かった。

コメント [y66]: むしろ、「最終問は1番じゃないかもしれない」と思ったことで、「帰納法の限界」を身をもって理解したことが重要です（苦笑）

経済学や法学といった学問と違い、哲学は発展させても私たちの生活に直接的な利益はもたらさないように思ってしまうという学生のコメントがあったが、先人たちの考えが起点となって現代に至っているの、哲学を学ぶことにも意味はあり、また、私たちは利益の為だけに行動しているのではない。実際、私は昔から数学が苦手、どうして数学をしなければならぬのだろうと考えていたが、地学を学び始めたとき、地球や宇宙のこれまでをきちんと理解しようとすると、数学的思考は役に立った。そのことから、学ぶことは、それぞれ少なからず繋がりがあ、知識の幅が広いほど生活は豊かになるのではないかと考えた。利益を得るために学ぶのではなく、自分の生活を豊かにするために、知識を体

系化していくべきではないだろうか。

ぜひそうしてください。

本日は、学生コメントをもとにした小テストの解説と前回の復習がなされた。

一つ目に、デカルトの「すべてのものは広がりをもつ」ということはデカルトによる物体の定義であり、経験的なものではない。ここで経験とは、個人的な体験ではなく実験という意味に近い。このデカルトの定義は、経験的に得られたニュートンの定義に対して新しかった。

二つ目に、ニュアンスの違いは理解できないと思われがちだが、ニュアンスの違いがあると言うことは、既に理解し比較しているということである。そのため、どんな言語のニュアンスも理解できる。しかし私は、前回伺った、その土地の子供たちが理解できるのだから私たちも理解できる、という考え方の方が理解しやすい。なぜなら、正確にニュアンスを理解していなかったとしても、母語とは違っていると言うことは可能であるからである。

三つ目に、愛国心を育てるということには、良い面と悪い面がある。良い面は、同じ国の人に仲間意識が生まれ、支えあうようになることである。それに対し悪い面は、敵対心を生むことがあり、戦争の推進手段にも利用されることである。必ずしも良いことではないという理解が大切である。

四つ目に、シャノンは1948年に『*The mathematical theory of communication*』を出版した。彼は二分法で、情報の量を定義できるとした。

五つ目に、哲学に直接的な利益はないが、気付くという点で役に立つ。私の解釈では、利益も役に立つ・立たないもあまり重要ではないということである。

次に前回の復習として、公理系とは何かを学習した。まず公理は、証明できない前提となるものであり、直観的に正しい。その公理は推論規則と合わせられ、定理に到達する。そして、その定理の体系が公理系である。

また、アリストテレスの「神」について復習した。世界の運動の第一原因は美であるという考え方に対し、アリストテレスは神であるとした。アリストテレスの考えは創造神というキリスト教の教義と矛盾するが、中世以降、両立が目指される。

最後に、デカルトの「神」について復習した。彼は、近代哲学の祖でありながら、古代哲学への回帰をした。初めに彼は、神は悪であるとした。神は自分をだますが、「わたしはある」ということだけは正しいとした。しかし後に、神の存在証明 ~~ラジヨナリズム~~に基づいて神は善であると改める。

書式変更: フォント: 斜体

コメント [y67]: どういうことですか?

今回の授業の小テストの解説の中で、「日本を誇れる」という趣旨の学生のコメントに対して、誇りを持つことが良い方向に向くこともあれば、悪い方向に向くこともあるということを知り、はたと気づいた。確かに、国民が一体感を持てば他人に対しても互いに支援をし合える。しかし、それが戦争の場合であると、無関係な市民が殺されることにも繋がってしまう。このマイナス面を見ると、「個人」を重視すべきだという意見も出てくるが、その傾向が強くなってしまうと、災害時の支援等が減少してしまう可能性がある。

前回と今回の授業で、認識論と存在論について時代順に哲学の発想の流れを学習した。ソクラテスの「イデア」に関する考え方、公理系という考え方、アリストテレスの「神」の考え方、アリストテレスから中世哲学への流れ、そしてデカルトへと前述の認識論と存在論についての思考の歴史を学んだ。

2回の授業を受けて面白いと感じたのはやはりデカルトの部分である。これまでデカルトについては、哲学の中興の祖となった、ロひげを生やしたロン毛のおっさんというイメージだったが、先生の話す小ネタのお陰でとても身近にデカルトを感じる事ができた。

同様に興味深く思ったのは、アリストテレスの考えが遠く数百年にわたって中世の哲学界を賑わせたということである。それだけアリストテレスが偉大であったことが改めて分かったし、一人の考え方があたかも数学における素数の仕組みやフェルマーの最終定理、ABC予想のように、後世の人間たちの脳みそをうんうん唸らせ続けていたというのが滑稽なようで面白い。

以前僕は哲学について、なんら実生活に役に立たない学問だと軽視の目で見ていたところがあるが、今回の授業を聞いていてなお一層のこと役に立たないと確信した。パチパチ燃える暖炉の横で椅子に腰かけ、神について考えて何の意味がある。そんな事ただの暇人がやることである。しかし、表面的にはそうでも、哲学とは万学につながるものである。たとえが悪いかもしれないが、それはお好み焼きやケーキの生地を使う小麦粉や薄力粉のような、そのものの味は全く料理全体に寄与しないが、その存在は料理にとって必要不可欠な、そういったものと似ている。かつての人は哲学をきっかけ、土台にして思考を深め、実学を生み出して今日の学問体系を作り上げたのだ。

このほどの授業は時系列に沿って、時々小ネタも挟みながら、哲学を学んだが、どうしてかこれまでの授業に比べてすんなりと先生の言っていることを理解できた。僕が歴史を好きなことも理由としてあるかもしれないが、もともと抽象的で実体のつかめないことが多い哲学の概念、そこに歴史やデカルトの実生活など具体的に想像しやすいことが挟まれたことで、それを足掛かりにして、ある種実感を持って哲学の流れをイメージできたことも、一つの理由ではないかと勝手に自分で納得している。以上先生の今後の授業づくりの

コメント [y68]: どんなネタなのか具体的に書いてください。

コメント [y69]: どんな考えなのか具体的に書いてください。

コメント [y70]: 具体的にどんなことを理解したのか書いてください。

参考になればと思ってコメントした。

全体として感想ないしエッセイになっています。授業から学んだことを具体的に書き、それを出発点にして考え、調べたことを書くようにしてください。

今回の講義では宿題の小テストの振り返りと前回の復習が大半であった。その中で「私はある。」といった言葉が出てきた。自分が自分であるという認識だけが信じられるものだという風に理解している。自分が自分であるという認識はつまりは「自我」があるということだと考えている。ここで疑問に思ったのだが、この感覚というものは人間以外の物にもあるのだろうか。例えば、動物。彼らに人間張りの自分が自分であるという心も認識はあるのだろうか。さらに、これから発達していくであろう AI。彼らにも自我というものは果たして現れるのだろうか。私の答えは動物や AI に自我はない。我々人間のような自我を保つには成熟した心が必要である。動物には人間のような発達した心はなく、また AI にも心の発現は難しいと言われる。なので自我は人間特有の物であるのだ。

コメント [y71]: どういう文脈で、どういう意味で出てきたのか説明してください。

コメント [y72]: なぜそう理解したのか、理由を書いてください。

コメント [y73]: そのように応える根拠を示してください。

コメント [y74]: 受け身表現は使わず、誰が言っているのか明示してください。

心身問題の展開の部分で、マルブランシュの説いた機会原因説によると、「物理現象はきっかけで感覚は神が起こす。」、「意志はきっかけで、身体運動は神が起こす。」、「普遍的な知識は神のうちにあり」とあるのだという。私は、物理現象→感覚、意志→身体運動というように、その人のうちで流れ起こるものであって、神の介入する余地はないものであると捉えてしまう。

コメント [y75]: なぜそう捉えるのか理由を説明してください。

コメント [y76]: 前はそこまで行きませんでした。

ライプニッツの説いた予定調和説によると、「物理現象は因果関係で展開する。心の現象も因果関係で展開する。両者はそれぞれ独立に展開するが、時間的に一致するように調整されている」とある。私も物理的な現象と心理的な現象の展開はそれぞれで起こると捉え、しかも時間的なズレ、タイムラグがないものである。独立して起こっていても、感じ取る身体は同じであるから、ほぼ一致しているように感じるのである。

今回の授業では、マルブランシュの機会原因説、ライプニッツの予定調和説について学んだ。

コメント [y77]: 前はそこまで行きませんでした。

機会原因説は、思いがきっかけとなり、それを神が感知し、私自身の体を動かしてくれる説である。そこで私が考えたことは、二つある。一つ目は、考えて行動するのは人間個人であるのに、どうして神が私たちの思いをくみ取って動かさせてくれているという思考に

コメント [y78]: 説明しましたが、聞いていませんでしたか？

いたるのか。二つ目は、人間の行動すべてが神によって私たちの体を動かしてくれるのなら、悪いこと、例えば、殺人や犯罪なども、神がそうするように私たちを動かしているのか。もし、そうであるならば、今までの悲惨な戦争は神によって意図的に起こってしまったのか。私には(?)「神様は正しい」という固定概念があるため、世界は神によって操られているとは考えられない。

コメント [y79]: 「神は人間の意思に対応するように体を動かしている」のであって、人間の行動を自在に操っているのではありません。

今日の授業はとても興味深いものであった。私たちは知らないうちに同じ日本人だから誇れるんだということを無意識のうちにに思うように政府に操作されていることを学んだ。政府は戦争をするためにこのような制度を作りあげたと山口先生はおっしゃっていた。徴兵制度はフランス革命の際にナポレオンが作ったと言われている。これが徴兵令を生み出し、フランス軍はほかの国よりも士気が高かったために無双ヨーロッパをほぼ制圧した。こうして、ナポレオンに対抗するためによってナショナリズムが各国に起こり時代が大きく変わっていった。

デカルトは方法的懐疑によって考える自分自身以外を否定し、神さえも疑った。しかし、神は善の存在であるとしたため、結局疑った事実は正しいとした。エリザベートは、絶対に疑えない心には物質性がないのに、どうして物質である身体を動かせるのかと質問したが、デカルトはそれを「証明不可能」とし、心身問題が勃発した。デカルトに影響を受けたマルブランシュは機会原因説を唱え、意志はきっかけで、身体運動は神が起こすとしたが、それでは神があまりに多忙となってしまう。

ユークリッドの公理

- 1.任意の一点から他の一点に対して直線を引くこと
- 2.有限の直線を連続的にまっすぐ延長すること
- 3.任意の中心と半径で円を描くこと
- 4.すべての直角は互いに等しいこと
- 5.直線が2直線と交わる時、同じ側の内角の和が2直角より小さい場合、その2直線が限りなく延長された時、内角の和が2直角より小さい側で交わる。

推論規則

- 1.同じものに等しいものは互いに等しい

- 2.同じものに同じものを加えると、同じになる。
- 3.同じものから同じものを引くと、同じになる。
- 4.重なり合うものは等しい。
- 5.全体は部分よりも大きい。

推論規則の内容を見てみると、「推論」するまでもない不変の事実を述べているし、少し考えれば誰でも分かる当然のことを書いているが、なぜ明記する必要があるのだろうか。定理とは公理を出発点とし、推論規則で到達できる命題とあるが「ユークリッドの公理」を証明するために、普通に考えれば当然であろう推論規則を本当に使わなければいけないのか。

詳しくは、山口裕之『認知哲学』新曜社の特に第II部を読んでください。

コメント [y80]: 「推論するための規則」なので、推論規則を推論によって証明することはできない。

コメント [y81]: 公理は推論の出発点であって、証明の対象ではない。証明すべきは「定理」。

コメント [y82]: 幾何学の証明や計算をするときに自分が何をしているのか、もう一度ふりかえって考えてみよう。

今回の授業は、まず宿題の答え合わせとその解説、そしてデカルトと心身健康問題の展開について学んだ。

宿題の説明の中で、経験論について復習した。経験論とは、個人の経験に基づいて事象を理解する方法、または理論のことでなく、実験や観察を通して事象を理解する方法や理論のことである。これによると、科学は経験論によって成り立つ学問であるといえる。実験や観察によって論理的に証明できない自然法則を解明していくのが、科学だからである。

しかし、科学的に自然法則を解き明かしたとしても、その法則の根拠となる実験や観察の正しさは、帰納法的に証明されたことに過ぎない。さらに、科学の実験や観察の試行回数は、無限に近い。例えば、実験や観察の試行回数が有限であるならば、対象すべてに適用することができる法則を見つけ出せる。しかし、試行回数が無限ならば、対象の事象すべてに当てはめられる法則を見出すことは、不可能になってしまう。そのため、自然法則を真理ということとはできないのだ。

次にデカルトの心身健康問題についてである。デカルトは、従来のスコラ哲学に不満を抱いていた。そのため、「絶対に疑えない真理」をもとに、学問体系を作り直そうとした。方法的懐疑によって、実在するのは私の心だけという真理に至ったが、それは「独裁独我論」、そして心と身体はどうして相互作用出来るのかという「心身問題」を引き起こす主張だった唱えようとした。

この心身問題について、マルブランシュは機会原因説を唱えた。物理現象はきっかけに過ぎず、感覚は神によって起こされるものであるというのだ。つまり、個人の意志はきっかけであり、身体運動は神が起こしているということである。普遍的な知識のすべては、神が備えているのである。

デカルトは従来のアリストテレス哲学に対して、「絶対に疑えない真理」をもとに、学問体系を作り直そうとした。自分の身体や世界を証明することはできず、実在するのは自分の心だけであるとする方法的懐疑を説き、厳格な二元論を樹立した。だが、心と身体はどうして相互作用できるのかという心身問題が生じた。

デカルトの方法的懐疑における心身問題を、マルブランシュは機会原因説 occasionalism として展開した。機会原因説とは、物理現象の原因はきっかけ occasion によるもので、感覚は普遍的な知識を持った神が起こすというものだ。意志(心)はきっかけであり、身体運動(身)は神が起こす。他にも心身問題から発展させた理論として、ライプニッツの予定調和説がある。また、スピノザの平行論もデカルトの心身問題から発展したものである。

なぜこんなにデカルトの心身問題を展開しようとする動きがあったのだろうか。西洋思想の三本柱は、キリスト教、プラトン、アリストテレスである。そのアリストテレス哲学に不満を持ち、それに対して学問体系を作り直したデカルトが十分に説明しなかった心身問題を解き明かし、学問体系をデカルトの完成させようとした。だから多くの人が心身問題を展開させたのだ。

(参考:『ブリタニカ国際大百科事典第15版』初版1768年)"

今回の授業では、主に、前回の授業の課題であった学生からのコメントとそれへの応答を詳しくみていった。例えば、「日本人が英語を訳すときに意味がたくさんある単語があったり、少しの日本語の違いからニュアンスが変わったりするということを主張する」というコメントに対して、「もしもあなたに英語のニュアンスが理解できなければ、日本語と英語でニュアンスが異なることも認識できないはずですよ」と応答した。ニュアンスの違いを認識できなければ、外国語を学んでも理解できない。だが、私たちは外国語を勉強し、理解できており、ニュアンスの違いも認識できている。

最後に、デカルトについてみていった。デカルトは方法的懐疑を説き、「わたしはある。」と述べた。実在するのは私の心だけであり、心と身体はどうして相互理解できるのかと心身問題を考えた。マルブランシュはデカルトの考えを受け、機会原因説を説いた。物理現象はきっかけで、感覚は神が起こし、意志はきっかけで、身体運動は神が起こし、また普遍的な知識は神のうちにありと考えた。

今回の講義で学んだことは、先ず、経験論とは何かについてだ。今まで、経験論とは個

人の経験に基づいて事象を理解する方法や理論の事だと思っていたが、それは誤解で、実際は実験や観察を通して事象を理解する方法や理論を経験論ということを知った。これは、つまり科学が経験論によって成立する学問だという事を示している。何故なら、科学は実験、観察によって論理的に明らかにできない自然法則を解き明かそうとする学問であるからだ。

しかし、科学によって明らかにされたとされる自然法則は、それを真理だと保証することはできない。その理由は、仮令、科学的に自然法則を明らかにしたとしても、その法則の根拠となる実験や観察の正しさは、あくまで帰納法的に証明されたに過ぎず、加えて、科学的な実験や観察の試行回数は無限を保証されているからだ。もし、実験や観察の試行回数が有限ならば、対象全てに適用される法則を見つけ出せ得るが、試行回数が無限ならば、対象事象全てを網羅する法則を見つけ出すことは、理論上不可能で、それ故、対象事象は常に科学的に証明された法則に反する可能性を孕んでいる。即ち、科学によって理解されたとする自然法則は、それが真であるか偽であるかを証明することは出来ないのである。

今講義で学んだこととして、次に挙げられるのはデカルト以来の心身問題である。彼は、方法的懐疑によって独我論、続けて心身問題を打ち立てた。しかし、彼は両者とも十分に説明、解消しきることが出来なかった。その為、後世、両問題が哲学者のテーマとなった。例えば、後者の心身問題を解消するため、マルブランシュが機械原因説を主張した。彼は、心と体は別物であり、それらだけでは互いに作用することはないが、機会(occasion)が原因となって神が感覚や身体運動、延いては万象を引き起こすと主張した。

今回の授業は前回の課題の復習と前回の講義の復習、そしてマルブランシュについてであった。

まずカントは分析命題と総合命題とを考えていた。分析命題とは主題の中に述語がこっそり含まれているもので、例えば「雨が降っているとき空から水が降っている」である。分析命題の特徴は絶対正しいということだ。雨が降っているのに空から水が降っていないということはない。ただし分析命題では知識は増えない。他にも「独身者は結婚していない」という例もある。

そして学生から『すべての物体は広がりをもつ』という命題が経験的ではないということに疑問があった」質問があった。その答えとして物体に大きさがあることは経験しているが物体がどんなものかという定義が正しいことは経験で明らかになるわけではないことを学んだ。例えば $1+1=2$ は我々が知ったことで正しくなるわけではないということである。もう一つ重要なことは哲学で使う経験は個人の体験というよりも実験であるということだ。つまり経験は実験によって明らかになるものということだ。例えば万有引力の法則で「質

量がある」と「互いに引き合う」ということは論理的に考えても正しいとはわからないが、実験をすると関係なさそうにみえたものがどうも関係があるらしいことがわかったのだ。対して $1+1=2$ というのは論理的に明らかなものである。また「すべての物体は広がりをもつ」というのはデカルトの物心二元論からきている。デカルトは substance(モノ)を thinking substance(心)と expansive extending substance(物体)にわけた。ここでの物体に身体も属していることも学んだ。

第三に「日本語と英語ではニュアンスが違うから翻訳できない」というものには「じゃああなたは日本人なのにどうして日本語と英語のニュアンスが違うということがわかるのですか」と尋ね返せることを学んだ。

第四に人々の共同体意識についても学んだ。例えばサッカーの試合をみて自分が試合に参加して勝ったわけでもないし自分の知り合いが参加しているわけでもないのに日本代表のサッカーチームが勝つとうれしくなるのはなぜか。また哲学を母国語で学べるのは自分が翻訳したわけでもないのに誇りに思うのはどうしてか。この共同体意識をうまく使ったのがナポレオンである。フランスで市民革命が成功すると周辺国から攻められた。この時に彼は近代ではじめて徴兵制を利用し勝利をおさめたのだ。19世紀に歴史の教科書がつけられ、同じ歴史を共有するものだと教えられ言語も国で一致させることで共同体意識を芽生えさせた。共同体意識は戦いを遂行するためにつくられたのだ。

第五に事実に関する問題には必ず答えが存在するし、たとえ正解がない問題(価値判断に関する問題)だとしても間違いはあるということを学んだ。

第六に「経済」という単語は翻訳語で世の中の仕組みを通じて民を救うという意味の経世済民からきている。それに比べて「economy」はけちくさいという意味もあり日本語の経済とはニュアンスが大きく異なる。さらにギリシャ語では「オイコノミケー」と言われるが、これは家に関する ことモノものごと という意味であることを学んだ。

第七にシャノンビットの考え方を発明した人で情報が量ではかかれると打ち出した。1ビットとは0か1かであり、たくさんの選択肢の中で一つのことを指定することができることを学んだ。

第八に Reality についても学んだ。ラテン語のレアリタスはものっぽいという意味で私の心の外部にもものとして存在するというのが最初の意味であった。アリストテレスはモノは目的を実現するポテンシャルをもっていると主張した。ここでの目的はモノが意志をもって行動しているのではなく、potential から actual への移行が世の中の根本原理だと主張しているのだ。例えば山口先生はおじいちゃんになるポテンシャルをもっているがおばあちゃんになるポテンシャルをもっていないといえる。

最後にデカルトの次世代、マルブランシュについて学んだ。彼はデカルトの「人間論」を読んで彼のファンになった。しかしデカルトが常識に回帰してしまい理由を特に明示していないことには納得できず、自分で考えた。それが機械原因説である。これは心と身体の間を神がつなげてくれているというものだった。例えば空気が振動して脳にまで届き、

神がそれをなんらかの音という感覚にかえて私たちに教えてくれるというものだ。

そして共同体意識についてだが世界史でヘルメスとバルバロイを習った。「個々のポリスは政治的には独立していたが、ギリシア人はともに英雄ヘレンの子孫という意識をもち、自らをヘレネス、異民族をバルバロイ(わけのわからない言葉話す者)とよんで区別した」(グローバルワイド新版三訂最新世界史図表、第一学習者、2016年発行、p23)とある。このことから古代から共同体意識が存在していたと考える。

近代における「国民国家」の形成期においては、国家によって人工的に共同体意識が作られた点が重要です。たとえば言語の統一、「国民の歴史」の編集とその教育、厳密な国境管理などです。

内容は満遍なくよくまとまっています。

今回の哲学の講義では、小テストの答え合わせと解説、前回の講義の復習、デカルト・マルブランシュについて学んだ。

まず、小テストとその解説について。最初に、数学の定義(1+1=2などの)は確かに経験によって知るが、その定義が正しいかどうかは私たちの経験に関係ないということ。さらに、万有引力の法則などによって、論理的に明らかな原理と実験によって明らかな原理があることを知った。

次は、デカルトとマルブランシュについて。デカルトは方法的懐疑によって、神は存在するのか、神は果たして「善」なのかを疑うところまでいった。しかし、私たちの心と身体が相互作用しあう理由を考える際に、神の存在まで疑うと不都合が生じたので、まず神は「存在」し、神は「善」であることを証明した。そうして、神は「善」であることを証明すると、方法的懐疑によって疑われていた「数学」の思想も取り戻すことができた。

曖昧になっていたデカルトの心身問題の答えを、もっと正確に考えようとしたのがマルブランシュである。マルブランシュは心が思うこと(身体を動かそうという意志)が occasion になって、その意志を神が感知し、実際に身体を動かすのは神である、という考えであった。けれども、意志はきっかけで実際に身体を動かすのは神である点は、マルブランシュもデカルトも変わらない。

小テストの解説の際に「正解がなくても間違いはある」という話を聴いて、それは、「答えがない問い」だと言われると答えは「何でもいい」と考えがちであるということだった。答えは「何でもいい」と考えたことはなくても、根拠なしに自分の考えを「答え」にするのも「何でもいい」と考えているのと結局は一緒である。

そうならないように、客観的な根拠をつけて自分の考えを主張できる人になってください。

西洋思想において、神とは、「世界が存在することの原因」である。「神が法則や論理や数学にもとづいて世界を創造した」という信仰のお陰で、自然科学が成立した。存在論 ontology=being の理論は、Being「存在 existence」と「～である copula」の二つの意味がある。プラトンは A is B で表される、A も B も exist する、むしろ個物は exist しない(単なる appearance)と考えた。アリストスは exist するのは個物であり、言葉で示される A や B は exist しないと考えた。また、日本人の宗教観については、30%の人が神の存在を信じている。

今回の講義は学生のコメントへの指摘でほぼ終えてしまった。学生コメントの一つ一つに熱心に、かつ丁寧に指摘していたあまり時間がいつのまにか過ぎてしまっていたようだ。学生のコメントへの指摘で終えるわけがないと勝手に決めつけてしまっていた私はノートあまりとらなかつた。ノートにとったのは「不動の動者は美人のねーちゃん」、「正解がない問題にも不正解はある」、「自分が行っていない行動に対し、なぜ誇りを持てるのだろうか」という三つであった。初めの「不動の動者は美人のねーちゃん」という先生の言葉は、小説のタイトルであればすぐに買ってしまうほど私を魅了する言葉である。二つ目の言葉は、哲学を学んでいる人からすれば当たり前なのかもしれないが、実に感銘を受けた。高校や予備校では答えがあるものしか見てこなかった私には、この言葉が新たな挑戦への第一歩のようであった。最後の言葉は、誇りについてだが、私自身も母国語で授業を受けることができる日本の制度に対し、誇りを持っていた。海外ではしていないことを日本ではやっているんだぞと誇らしげになっていた。しかし、それはただ誇らしげになっていただけで、自分は何もしていないので、本当は誇りに思えないことである。では、なぜ誇りに思ってしまうのだろうか。それは教育のせいである。学習教育の場で日本文化の素晴らしさや他国と比較して日本が優位であるところを教えられるからだ。日本の文化などを誇りに思うことは良いことだが、自分が行ったことに対し誇りを持てるほうが良いであろう。

授業時間中にメモをとって終わるのでなく、読み直して内容を思い出すことが重要です。そのための機会として復習コメントを宿題にしています。

デカルトの方法的懐疑で世界や自分の体があるということをどうやったら証明できるのか、神がもしかしたら欺いているのではないかとあり、そこから神がいるという証明をはじめるとあったが、デカルトは神がいるという証明するさいにどのような方法を用いて行ったのか。

我々は有限だが無限を知っている、このことより神が実在するという事を述べるには難しいのではないか。

アリストテレスの考えのように神が最高善でも永遠的であっても生者であると断定して

しまうと形付けされてしまうのではないだろうか。。
形ができてしまうとそれは連続性を持たなくなり無限とは言えないのではないだろうか。。
これより私は、デカルトがどのようによって神の証明を行ったかを知りたい。。
知りたいなら、調べてみましょう。
それから、○を打ちましょう。

今回の授業では前回までの授業コメントについて的小テストの解説と少し前回の続きの内容だった。

小テストについて、先生が授業で言うまで全問の正答が 1 であることに全く気付かず回答したが、周囲の学生の反応から、皆気づいていたようで、自分の注意力の無さが少し気がかりになった。

しかし、最後の問いは、論文のリンクに飛び、内容がなかなか理解できず回答に手こずったため、なんども声を出して読み、正解にたどり着けた点では、気づかなくてよかったと感じた。よくわからなくても 1 と回答せず、理解できるまで読んだことで、先生が意図していた復習テストとして意義のあるものになった実感が自分自身にあるからである。

毎回の授業の小テストは授業終了直後は理解がスッとできていないため、選択肢を吟味している間に次の設問へ移ってしまい、なかなかじっくり復習できないが、課題の小テストはじっくり復習できる機会となるので大変有り難い。

コメント [y83]: ということの繰り返しによって、知識が付き、読解力も身につきます。